課題　写真

「いつも一緒」

人物

関優一（２４）会社員

田中達也（２８）介護士

石井浩之（１７）関と田中の同級生

男（５５）酔っ払いの男

○田中のアパート

８畳程度の部屋。

こたつテーブルの上には、酒のつまみのお菓子と家庭用のたこ焼き機があり、熱々のたこ焼きが出来上がっている。

関優一（２４）がゾンビを倒すゲームをテレビ画面でやっている。

関の恰好は、スーツで上着を脱いだ格好である。

テレビ台の横には３人組の笑顔の写真がある。

制服姿の関（１７）とその他２人が写っている。

ゲームの画面では、主人公がゾンビに襲われて血まみれになりゲームエンドとなる。

関「うわー！」

田中達也（２４）がチューハイ２本持ってやってくる。

田中の恰好は、「シャツにスウェットである。
その顔から、田中は写真の中にいた男の一人だとわかる。
田中「あ、やられたの？」
関「やっぱ、ヘタになるなー」
関、田中からチューハイを受け取る。
田中「そりゃ、そうだろね」
田中は座って、タコ焼きを食べはじめる。
関「え？何が？」
田中「やってないんだからさ、ゲーム」
関「…ああ」
田中「僕、勝てるよ」
関「お前が？」
田中「うん。やってるから、今でも」
関「一番、へたくそだったのに？」
田中「僕らの思い出だから」
関「ふーん」

関、テレビ横にある写真をちらっと見る。

田中「仕事はどうなの？」

関「変わらないね。営業なんてどこも同じ」

田中「同じ？」

関「達成達成ってさ、ノルマのことしか言わない」

田中「そうか：」

関「お前には向かないな、絶対」

田中「そうかな？」

関「お前、優しすぎだから」

田中「そうでもないよ」

田中、さっき関がやっていたテレビゲームをはじめる。

関「え？だから介護士なったんだろ」

田中「ここが、難しいんだよね」

テレビ画面が写り、画面の中のゾンビをゲームのキャラがめった殺しにする画面がでてくる。

田中「で、ここでこいつが出てくる」
急にでてきたゾンビをうまい具合に、ゲームのキャラが仕留める。
関「さっき、上手くいかなかったよ、そこで」
田中「うん難しいよね、ここ」
関「…なあ、介護って大変？」
田中「大変っていうほどでもない。やっぱりお年寄りって弱いからね」
関「弱い？」
田中「なんだかんだで僕らがいないと生活できない人たちだから」
関「でもホラ、ぼけてたりすると暴言とかあるんだろ？」
田中「弱い犬はよく吠えるでしょ」
関「え？」
田中「弱いから一生懸命ほえるんだよ」
関「…」
田中「ちゃんと世話すればかわいいよ」
関「かわいい…？」

田中「うん」
関「…お前かわったな」
田中「そう？」
テレビ画面では、ゾンビは全滅している。
関「ゲーム上手くなったし」
田中「何も変わってないよ。あの頃と」
田中、3人の写真を見る。
関も写真をみる。
田中「…なんで笑ってんだろうね」
関「え？」
田中「もう死んじゃっているのに」
関「俺、今でもわかんないんだよな。なんでヒロが自殺したのか」
田中「そんなの、分かるわけないょ」
関「…まあな」
田中「まあなって。ユウくんには一生かかってもわかんないよ」
関「そうか？」
田中「ごめん。僕も一生わかんない」

関「まあな：ちょっとトイレ借りていい？」

田中「うん」

関が部屋からでていく。

田中、こたつの上に無造作においてある財布をみる。

財布は千円札が10枚くらい入っている。

田中、関の財布から千円札を1枚ぬき、自分のポケットにいれる。

水洗トイレの音がして、ドアが開く音がする。

関の声「なあ、タオルどこ？」

田中「ごめん。洗面所の横にあるんだ」

田中、3人の写っている写真をみつめている。

関、部屋にもどってきて田中が写真をみている姿をみつける。

関「…電車に飛び込むのってどんな気持ちかな？」

田中「え？」
関「ヒロって、いつも笑ってたよな」
田中「うん」
関「でもあいつさ、隣のクラスのやつの金、カツアゲしてたんだよ」
田中「そうなんだ：」
関「他にもいろいろ悪いこと一杯やってってさ、中学の時は影で女子いじめて不登校にしたりとか」
田中「しらなかった」
関「俺も死んだあと、知ったんだよ」
田中「そう：」
関「お前がいうように、弱かったんだろうな」
田中「え？」
関「ほら、弱いから吠えてたんだよ。きっと」
田中「ああ：」
3人の笑顔の写真がアップで映る。

田中「じゃあ僕らみんな弱かったのかもね」

関「…俺は自分がバカだったなって思っているけどな」

田中「どういう意味？」

関「そのまんまだよ。そろそろ帰るわ。明日も仕事だし」

田中「あ、うん」

関「こんなご馳走してもらっちゃってさ、金払うよ」

田中「いいよ。僕が誘ったんだし」

関「そう？」

田中「うん。この前、出会えて本当にうれしかったんだよ」

関「俺もうれしかったよ。お前、元気そうでさ」

田中「地元でもないのに偶然あえるなんてすごいよね」

関「ああ」

田中「運命かな？」

関「そんなわけないだろ」
田中「じゃあ、ヒロくんが引き寄せてくれたのかもね」
関「：そうかもな」

○同アパート　台所

田中が一人、台所で洗い物をしている。たこ焼きのピックが指にささり、血がでる。
田中「痛っ…」
田中、後ろを振り返ると隣の部屋にある写真がみえる。
田中、洗い物の手をとめ、写真のある部屋に移動する。
写真を床になげる。
田中「なんだよ。なんでまだ笑ってるんだよ」

○駅のホーム（夜）

人気のない駅のホーム。

関は一人、ベンチに座っている。自分の財布を出して、千円札の枚数を数えている。

酒に酔った男が歩いてくる。

男「なに？にーちゃん金持ちだな」

関「そうでもないっすよ、ホラ」

男「なんだ。千円か」

関「さっき金とられたんです。友達に」

男「そりゃ、友達じゃねえな」

関「そうっすね。でもそう思ってたんですよ。俺は」

男「ま、気をおとすなよ。人生なんてそんなもんだから」

男はそのまま去っていく。

関、黙ったままベンチに座っている。

通過電車が通りすぎる。

向かいのホームに血だらけの石井浩之（117）が、関を睨みつけるような表情で立っている。

了